

---

# 閻魔大王のカウントダウン

みどり風香

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

閻魔大王のカウントダウン

### 【Nコード】

N2467V

### 【作者名】

みどり風香

### 【あらすじ】

「君は、あと三日で死ぬ」突然現れた閻魔大王は、ヒューズケンにそう言った

注意：柵越え、史実ネタ、腐向け、死ネタなどの要素が入ってます。

「君は、三日後に死ぬ」

突然僕の目の前に訪れた奇妙な男性は、そんなことを言った。

「ハリスさん、ちょっと出かけてきますね」

僕は上司にそう断って玉泉寺を出る。その上司ハリスさんはいいと、机に何冊もノートを広げてそれとにらめっこしていて、僕の声は届いてなさそうだった。インパクトばかり求めて暴走することが多くて苦労させられ続けるけど、あんなふうに真剣な顔をされると苦労も忘れる。……真剣に考えていることがいかに変でも。

日本に来てからだいぶ経つ。まだ価値観や習慣の違いに戸惑うことはあるけど、それでも長く居ついたぶんだけ慣れた。ハリスさんの奇行にも慣れた。今ではあの人とずっと一緒にいたいと思うようにさえなってしまうている。

願わくば、日米修好通商条約が締結されなければよかったのに、なんて。不謹慎なのは分かっているけれど、考えずにはいられない。そうなれば、それだけあの人とここにずっといられるから。いつの間にか、僕はとんでもなく欲張りになっただけらしい。

吹いた風が肌を刺す。もうこんなに寒くなっただ。今夜は暖かいものでも作ろうか。ハリスさんは何が好きかな。前、お邪魔したお宅のお弟子さんからいろいろと日本の料理を教えてもらった。その中から、今ぴったりそうな料理を探す。やっぱりお鍋にしよう。材料はその人たちからいっぱいもらったから大丈夫。あ、あのお二人、誘おうかな。みんなで囲うから鍋はいいんだって言うていたし。そう考えると、自然とあの人たちの仮住まいを足が目指していく。なんとなく、気持ちかはやる。

いつの間にか、目の前に人がいた。気づかなかったのかな。周囲

にはその人以外誰もいない。この空間に、僕とその人だけが残って切り取られたような気がした。

その人は、変な人だった。日本人の着物ではないけれど、それに近い服を着て、頭には大きな帽子をかぶっている。その帽子には「大王」としつかり書かれていた。……何なんだ、この人？

僕をじつと見つめるその目は動かない。真面目そうな目つきでにらまれてはいるけれど、別に脅威を感じるわけではない。むしろ、親しみさえ覚える。

「あの……」

「君は」

その人は、僕の言葉をさえぎって、ただ一言、言った。

「君は、三日後に死ぬ」

と。

時間が、止まった気がした。日本語はだいたい分かるから、彼が何を言ったのかは一応分かる。

えっと、僕？ 死ぬ？ 三日経ったら？ うん。理解した。

でも、その言葉に込められた意味を頭が理解するまで、時間が必要だった。

「死ぬって、僕がですか？」

間抜けな声で、目の前のおかしな人に聞いてみた。

「そう」

「三日後に？」

「うん」

「死因は？」

「それはいえない」

「それは間違いないじゃなく？ 冗談じゃなく？」

「真面目に。本当。君はあと三日で命が尽きる」

声色はいたって本気だ。実はどつきりでしたーという空気でもなさそうだ。たぶん、この人の言ってることに、嘘は少しも入っていないのだろう。

死神なのだろうか。それとも悪魔なのだろうか。僕に近づく死を宣告したその人は、死神らしくない、かといって悪魔らしくもない。だって、死神とか悪魔だったら、そんなつらそうな顔をしないもの。

「そうですか」

ため息ひとつでその宣告を、僕は受けとった。

「落ち着いてるね」

「ええ」

あと三日で死ぬと言われた割に、僕は驚かなかった。むしろ、これほどまでに落ち着き払っていた自分に驚いた。

お世話になった師弟さん二人を誘い、僕は玉泉寺に戻った。お弟子さん 曾良さんが手伝ってくれた鍋は、ハリスさんに好評だった。

「だいぶ料理がうまくなったな、ヒュースケン君」

「それはよかったです」

「また作ってくれたまえ。今年の冬は寒すぎて凍死しそうだからね。僕はそれを苦笑で答えた。はつきりと頷くことはできない。来年どころか、今年の冬だって越せるほど命が長くないのだから。

「ヒュースケンさん？」

「……あ」

曾良さんが心配そうにこっちを見上げている。……というかこの体勢はなんだろう。いつの間にか、曾良さんが僕に擦り寄ってきて、猫みたいにじやれてくる。

「あの、曾良さん？ 猫のまねですか？」

「そんなところですよ。猫は意外と飼い主を気にするのです」

「僕は貴方の飼い主ですよ……」

曾良さんなりの遊びへの誘いかな。付き合っただけよとして、お師匠さんの芭蕉さんが割って入った。

「こらあ曾良くん！ ヒュースケン君に失礼でしょ！」

「……ちっ」

「あ、ちよつと何舌打ちしてんの！！ もう帰るんだよ！」

「空気読まないふざけたジジイですね」

「ひどい！ もう帰るんだよ！ 長居しちゃご迷惑でしょ！」

「いえ、よかつたら、泊まっても大丈夫ですよ？ ハリスさんにもぎやかになるって喜びますから」

悪いねえ、と芭蕉さんは言っただけで曾良さんを僕から引っぺがした。その後、盛大に舌打ちされ断罪を受けた。

仕事が少し残っていたので、三人が先に床につき、僕一人は小さな灯りを頼りに書面とにらめっこしていた。残業にも慣れていて、あの人の尻拭いを考えれば、仕事が多くなるのはいつものことだった。

ふと、また空間が切り離されたような感覚が、体中を覆った。僕はペンを走らせていた手を止める。机から目を離して、伸びついでに後ろへ体をひねると、先ほどのおかしな人がきちんと正座していた。

「また、あなたですか」

僕はその人に向き直る。室内では、さすがに帽子を取っていた。

その帽子は彼の横にちよんと置かれている。

「なにか、ご用ですか？」

「特に、用ってわけじゃないけど」

「お仕事にさしつかえちゃいますよ」

「いや、まあ、うん……」

仕事という単語に、彼は気まずそうに僕から目をそらす。本当にさしつかえてるようだ。それも相当。

「そういえば、貴方の名前を聞きませんでしたね」

「うん。オレは、閻魔大王」

「えんま……？」

確か、死者を裁く王と聞いたことがある。死者の生前の行いから、死後天国へ行くか地獄へ行くかを決定する冥府の王。

改めてその人を見直す。年は、僕よりは上だろっけど、まだ若い顔立ちだつて、整つてはいるけど恐怖心を持たせるようなものじゃない。正直、僕のイメージしていた冥府の王とはずいぶんかけ離れているような。

「とてもそんな人には見えませんがね」

「よく言われるんだよね」

はは、と閻魔大王は笑う。冥府の王も笑うのか。

「昼間、僕に死刑宣告しましたが、あれは仕事の一環ですか」

「いや、アレはオレの自分勝手」

「自分勝手に人に寿命を教えちゃつていいんですか」

「とつてもよくない。バレたら秘書から串刺し刑をもらつちゃう」  
「ならどうして、教えたりしたんです？ あんなこと聞かされたつて、誰も喜びませんよ。僕一人だけそうなりませんでしたけど。ていうかびっくりしましたけど」

「ん……」

彼はうつむいていいにくそうに目を泳がせる。

「どうしてなんだろっね。ただなんとなく？ 君に伝えなきゃって、思つたから」

彼のあの行動は、何かしらの確かな理由があつたわけじゃないらしい。本能とか心の奥底とかそういう目に見えないものが突き動かしたんだろっ。

「三日後に死ぬ、つて言つてましたけど、それは本当なんですよね？」

「本当。オレ、人の寿命が分かるから」

「で、死因は？」

「言えない」

「なぜ僕は三日後に死ぬんですか？」

「それも言えない。言っちゃいけない決まりなの」

「いつ死ぬかは言ってもいいと？」

「うーん、グレーゾーンかな？ 誰にでも言ってるわけじゃないよ。オレだって忙しいんだから」

その忙しさの合間を縫って僕に会いに来てくれて、なおかつ死亡宣告を受け取ったというところでもなく破格の待遇を受けたことは、本来喜ぶべきことなんだろうがそんな気持ちは少しもわいてこない。それが自然な感情なんだろうな。

「では、もうひとつお聞きしますね」

僕は一言おいた。

「なんでそんな泣きそうなんですか」

閻魔大王は、膝の上に震えた握り拳をおいて、唇をきゅっと結んで僕から目を離さない。その目だって、今にも大泣きしそうだった。「閻魔大王という方が、そんな顔したら、示しがつかないでしょう？」

僕は閻魔大王の手をとって、そっと開かせる。手のひらから、じわじわと血がにじんでくる。ああ、これ、相当強く握ったな。ハンカチをその手に巻く。これで完璧だとは微塵も思っていないけど、何もしいよりはいいだろう。

「秘書さんに、ちゃんとした手当てをしてもらってください。僕は閻魔大王への正しい手当てなんて分かりませんから」

「うん」

人間にこうして触れられても何もしいない。むしろ触れてくれたことを嬉しがっているふしも見当たる。

「というか、本当に閻魔大王なのか？ 一介の人間に世話をされるなんて、これじゃあ駄目な上司を部下が世話焼きしているみたいじゃないか。」

「寝ないの？」

そんなことを聞いてきた。この人の言動は、いつも突然すぎてついていけるかどうか不安だ。

「これが終わったら」

僕は机の上の書面を指差した。

机に向かいなおしてわずかに残った仕事をすぐに片付けた。

くるっと向き直ると、姿勢正しく正座している閻魔大王がこちらを見ていた。……まさか、僕の仕事が終わるのを待ってたんじゃないだろうか。アレだけの熱視線で睨まれていたのに、僕は不思議と感じなかった。いや、感じたことは感じていたが、アレは子供を見守る父親のソレだ。なんだか、懐かしい。日本に来てからは、ハリスさんが時々僕に向けてくれていた気がする。

「僕、もう寝るんで」

「うん」

床までついてきた。ほんとにこの人は何がしたいんだ？

「秘書さんに、刺されないといいですね」

「うん」

僕はそれだけ言って目を閉じた。額に、冷え切った手が置かれた。氷よりも冷たいその手は、なぜか寒気を感じさせなかった。慈しみの手だ、これは。

僕の死は、あと二日。

その日、僕は午前中にやるべきことを片付けて、午後は暇を持って余すことにした。今日の朝一番に、相手の気持ちも考えずに会いたいと電話してしまった僕は、やけに積極的過ぎると後になって自分に失望した。あと二日で、やり残したことをできるだけ終わらせたかった。仕事を根性で終わらせた自分には、一応賞賛を与えておこう。

玄関から、人の声がした。僕は急いでその人を迎える。

黒船に乗ってやってきた提督の部下、海軍軍人コンテール大尉。嬉しそうな微笑は、僕の心を突き刺して行く。

「ヘンリー、来たよ」

「いらっしやい。どうぞ、あがってください」

ハリスさんは、大尉の上官ペリー提督とどこかへ出かけた。そうさせたのは、ほかでもない僕だ。人払いにここまで回りくどいことさせる僕は、変なんだろう。

僕はお茶と菓子差し出す。

「しかし、驚いたな。ここ数年ずっと音信不通だったのに、いきなり電話してくるなんて。君、手紙の返事も出さなかったくらい僕を拒絶していたのに」

「そうですね。ちよっと……思うところがあって」

「ふうん？」

大尉は机に頬杖ついて首をかしげる。向かい合いの状態だからなのか、彼の視線が痛いくらいに実感できる。

「……ヘンリー？」

「はい？」

「何かあったのか？ 僕に会いたいと言うくらいだから」

「まあ、あったといえはありましたが、取るに足らないことですよ」

「そう。……その割には浮かない顔だな」

「大尉がそう思われるのならそうなのでしょうね」

大尉は手を伸ばして、僕の前髪に触れ、かき上げた。

「前髪で目を隠されていて、僕には分かるんだよ」

「そのようですね」

不思議と、僕はその手を拒まなかった。前髪が目を隠していたことがあって、「目、悪くなるよ？」と会うたび会うたびかき上げられまくっていたのが嫌で嫌で仕方がなかった僕は今の髪型に落ち着いていてこれでもうかき上げる必要もあるまいと一人勝ち誇っていたかつての僕が懐かしい。

「大尉は、結婚なさらないんですか？」

「なんだい藪から棒に」

「気になっただけですよ。大尉はルックスいいですし、性格は……猫をかぶれば及第点ですし、地位も金もありますし、引く手数多だと思うのですが」

「君、僕を褒めている振りしてけなしているだろう？ 分かるよ？」  
大尉は、まだ僕の前髪をいじっている。

「とうかねえ、君、僕の気持ちを分かっている上でそう聞いているのかい？」

「だったらどう切り返します？」

……違う。本当は、こんな意地悪言いたくて呼んだわけじゃないのに。その逆なのに。

「そうだねえ……僕には目の前にいる人に生涯の愛を誓った身ですから、とでも返しとこうか」

大尉はそういつて微笑んだ。ああ、この笑顔は反則だ。余計僕が意固地になるじゃないか。

する、と大尉の手が僕の頬へ降りて撫でる。

「今、教えようか？」

頬から顎へ降りて、持ち上げる。この先何をされるかなんて容易に想像がつく。こんなストレートな求愛行動、会ってから幾度となく受けてきた。そしてソレに対して、僕は彼の口を手でふさいでガードしてきた。

だけど、僕はソレをしなかった。あと二日で死ぬならこの人の自由にさせてもいいだろうと半ば投げやりだった。でも僕が大尉に色よい応えをしたわけじゃない。つまり、体だけの関係と同じ。一夜よい夢を見せてやるのと同じ。……それがどれほど、彼にとって傷つくことなのか、分かってはいるけれど。

どうぞお好きに。どうぞ僕はあなたと結ばれない。そうなったとしても、あなたとは二日後に永遠のお別れだ。ざまあみる。

「……」

彼は目前で動きを止め、離れた。

「大尉？」

「ヘンリー、見くびらないでもらおうかな」

彼は真剣な面持ちで、僕を睨んだ。

「君が僕を思っていないことなどつくに分かっている。君から愛をもらえないのに、表面上の愛だけもらったって惨めなだけだ。いつもの君なら、先手を打って阻止しようとするだろう」

この人は、本質を正確に見抜いた。

「ええ、そのとおりですよ」

違う。僕は、この人を傷つけるために来てもらったんじゃない。

一言だけ。ただ一言、お礼を言いたくて呼んだはずなのに。

別の言葉、まったく逆の言葉をすらすら紡いでしまう。

「どうせ、僕とあなたは結ばれない。身分も違う、役目も違う。何もかも違う。僕はあなたが嫌いです。それ以上になんとも思っていない。人生の中でほんの少し知り合った程度にしか認識していません。これから再び会うこともないだろうから、この際一度だけでいいからあなたの好きにしてやってもいいかと思っただけです。哀れですね」

そう、憐れだ。僕が。

大尉の上に乗っかって、胸倉を掴んだ。

「いいんですよ、好きにしたって？ ハリスさんはどうせ提督と話しかんで遅くなるまで帰ってきません。ここには僕とあなた二人だけ。誰にも邪魔されない、道具はすべてきちりそろっている、こんな最高の環境またとありませんよ？ さっさと好きにしたらどうですか？」

違う違う違う。違うのです。本当に言いたいことは、こんな、あなたにとって残酷極まりない言葉なんかじゃない。

「抵抗しません。望むならなんだってやってやりますよ？ 一夜限り、いい夢見させてやりますよ？」

「ヘンリー」

彼は僕の肩に手を置く。

そうじゃない。本当は、違う。何で、止まらないんだ。

「好きにすればいいでしょう？ どうせ、僕らはあんたの望む未来にたどり着かないんだから！」

それ以上、何も言えなくなった。

彼は、強引に僕をかき抱いた。その力は、強い。僕の言葉をときらせるほど。

「君が言いたいのは、そうじゃないだろう？」

耳元でそう囁いた。本当にこの人は本質を見抜くのがうまいな。僕限定だけ。

「君は、むやみに人を傷つける言葉を出せるほど、意地悪な子じゃないよ。僕に対してさえ、心をえぐるようなことはしない。君は、僕が心配するくらい優しい子だよ」

諭すように、僕に言う。本当に反則だ。泣きたくなるのをこらえるのに必死だった。

「……すみません。取り乱して」

「いいよ」

「本当は、お礼がしたかったです。あなたの気持ちには応えられないけど、それでもあなたが僕にくれたものはすばらしいものだから。あなたが僕の今を形作っているひとつだから。ごめんなさい。」

ごめんなさい

「いいよ」

「大尉、本当に、ありがとうございます。でも、もう僕のことには忘れてください。あなたには応えられません。もし、本当に好きになっても、すぐに永遠のお別れしなくちゃいけなくなるんです。僕のこととはただの記憶に変えて、別の人を愛してください。幸せになって。あなたの隣に、僕じゃなくて別の素敵な人がいることを祈ります。どうか、幸せになって。それだけです」

「……本当にどうしたというんだ？ いつもの君なら、かわいらしい皮肉をとめどなく吐き出すのに」

「何ですか、それ」

僕は苦笑した。そつと、微々たる力ではあるけど、抱き返す。それに気づいたのか、大尉はまた力を込めて抱き返す。

気づかなかつた。もつと早くに気づくべきだったな。この人、とても暖かい。この人の胸は、安心する。いまさらもう遅いけど。

この日、ハリスさんは提督の泊まっている宿で一晩世話になるそうだ。夕食前に、そう電話をもらった。本当に、この日は二人きりだった。

大尉と食事して、のんびりして、月がきれいだといわれて、適当に返して、そうして僕にとっての貴重な一日は消費されていく。大尉と一緒にいる時間が、楽しいと分かっていたらなら、あんなにかたくなに拒むことはなかっただろう。今さら遅いけど。

就寝だって、彼は同じ布団で寝ようと誘っただけで、寄り添って寝るだけで、それ以上のことはしなかった。

「いい夢を、ヘンリー」

「そちらこそ」

彼は優しく僕を胸に抱き寄せる。この優しさは、僕に向けられるべきではない。どうせ僕は死ぬ。分かっているながら拒まないのは、僕が甘えていたいからなんだろう。

ふと、枕元に、閻魔大王が正座していたのに気づいた。

「……あ、大王だ」

「うん。……邪魔しちゃった？」

「いいえ。大丈夫です。あ、でも彼を起こさないようお願いします。とつてもいい寝顔なので。きつといい夢を見てるんだと思います」

「オレもそう思う」

彼は力なく笑っている。また、あの冷たい手を僕の額によこした。「血が通ってないみたいです。冷たさが異常ですよ」

「そりゃ閻魔大王だからね。人間とは体のつくりがちよつと違うんだよ」

ああ、確かに。

「……君は、あと一日だけ生きられる」

「明日まる一日?」

「うん」

「次の日には、死ぬんですか?」

「うん」

その与えられた時間は、ハリスさんのために全部使い切ろうと決めた。これは、閻魔大王に宣告されたときから決めていたことだ。

「ごめんね」

「なぜあなたが謝るんですか」

「オレには、これしかできない。君の寿命を延ばして上げられない。君は、君の思う人と一緒に幸せを長く感じているべき人なのに」

「仕方ないですよ。そういうものだから」

閻魔大王は、僕にごめんと残して、消えた。本当に何しに来たんだろう。秘書さんに射されてなければいいけど。もう少して死ぬ僕が閻魔大王というとなつてもない存在の人をなだめている。おかしな関係だ。僕は大尉の胸に顔をうずめて、睡魔に従った。

僕の死は、あと一日。

その日の僕は、いつもよりずっと早くに起きた。朝食を用意して、ハリスさんを起こして、仕事を音速で終わらせて、ずっとハリスさんと寄り添っていた。

ハリスさんが喉渴いたといえ、すかさずお茶を出し、疲れたといえ、肩をもむ。ハリスさんのむちゃなインパクトにも、ハリスさんが不審に思わない程度に付き合った。

やれることはやるだけやった。つもりでも、ひとつやり遂げるともつと何かしてさしあげたいという欲望がわいてくる。大切なものは、失って初めて気づくというけれど、それを思い知った気がした。僕の命が尽きると分かって、ハリスさんと一緒にいるこの時間がどれだけ大切なものか、痛いほどに思い知った。

でも遅いのだ。いまさら大切がったって、明日には死ぬんだから。

夕食は、ハリスさんの好きなものだけ作った。いつも、健康に響くからと、ハリスさんには悪いけど健康的なものばかり作っていた。でも、今日くらいはハリスさんの好きなものを出してあげたかった。もう、この人のために料理することはできないのだから。

「おお、私の好きなものばかりじゃないか！ 君もようやく私の希望に応えるようになったか」

「なんですかそれ。今日だけですよ。いつもこんなんじゃ、体壊しますから」

「ちえー」

食後、のんびりしていたハリスさんに、僕はたぶんとんでもない爆弾発言をしたんだと思う。真剣な表情で、頼み込んだ。

「ハリスさん」

「どうしたんだい、ヒュースケン君？ 急に改まって」

「お願いがあるんです。ソレを聞いてくれたら、もうわがまま言いません。巨泉にも乗ります。これから行うであろう交渉で歯も引っこ抜きますし、がんばりもします。ですからお願いを聞いてください」

「ん、言つてごらん」

「い、一緒に、寝てくれませんか？」

ハリスさんは、はとが豆鉄砲食らったような顔をしていた。十秒くらいして、ハリスさんは意を汲み取ったらしく、僕の肩に手を置いた。

「ヒュースケン君、私はね、そういう事情とはまったく無縁でいることを誓ったのだが……」

「いえ、そういう意味の寝るではなく、添い寝して欲しいって意味なんです……」

「あ、そうだったの？ いいよいいよ。まったく君は今日に限って甘えんぼさんだな」

うわあ、あっさり承諾してくれた。しかも僕が今日に限ってハリスさんに親切なことに何の疑念も抱いていない。それはそれで都合

いいけど。

床に入ると、ハリスさんがそつと抱き寄せてくれた。昨夜は大尉にそうしてもらっていただけ、次の日には別の男と床を共にするつて、僕つて嫌なやつだな。

「それより、どうしたというんだい？ 今日はやけに私に寛大じゃないか。いつもならあんなに私を甘やかしてはしないのに」

さすが僕の上司といたい。僕の奇行（？）に気づいていた。

「なんとなくですよ」

「そうかい。おやすみ」

「おやすみなさい」

でもそれ以上追及してこなかった。

「ハリスさん」

「ん？」

「起きてました？」

「そんなすぐに寝られないよ」

「すみません、もうひとつわがまま言わせてください」

「うん。いいよ。今日は君が甘やかしてくれたからね」

「キスしてください。どこにするかはお任せします」

ハリスさんはやれやれというだけで、嫌がりもため息もなかった。

「君、ずいぶん甘えたになつたなあ」

ハリスさんは僕の前髪をかき上げる。この行為、大尉じゃなければ僕だつて嫌がりはしない。

ちゅつと、額に優しいキスが降りる。

「君の期待に添えたかどうかは任せるよ」

「いえ、これで満足です」

閻魔大王は、枕元に座っていなかった。それが寂しかったのは否めないけど、あの人だつて忙しいんだからと自分に言い聞かせた。

ハリスさんの寝息を耳にしながら、僕も眠りにつく。

僕は、明日には、死ぬ。

その日は確実にやってきた。その日、僕はちょっとした仕事で外に出ていた。ひと段落して、外で空気でも吸ってこようと宿舎を出る。

また、空間が切り離されたような感覚。これは、僕とあの人がつながる時の感覚。

目の前に、泣くのをこらえる閻魔大王が立っている。

「もうすぐですね」

「うん」

「僕、死んだら天国へいけるでしょうか」

「今は、言えない」

「そうですね。どうせ、分かることですものね」

閻魔大王は僕に近づく。この人はどうして泣くのを抑えるんだろう。泣いても誰も気づかないのに。僕一人だけ驚くけど。ていうか慰めるけど。

「ごめんね。君は、もう、もうすぐ死ぬ」

「はい。でもいいんです。やれるだけのことはやりました。この先どんな死に様でも、たぶん気にしません。……痛いのは嫌ですけど、ちゃんと笑えているだろうか。ちゃんと、閻魔大王をなだめてくれるだろうか。

いきなり、閻魔大王は僕を抱き寄せた。この三日間で、僕は三人に抱きしめられている。これ、喜んでいいのか？

「な、なんですかいきなり」

「泣いていいよ」

それだけ、彼の言葉はそれだけだ。

いつの間にか、僕は泣くのを彼以上にこらえていたらしい。一番素直になれるハリスさんの前でだって泣かなかったのに、この人にすぎりついて、僕はわんわん泣いた。

周囲に人がいることなんて考えていなかった。たぶん、人払いはしてあったんだろう。あの感覚がするときはずっと、僕と彼以外の心配がなかったから。

「もつと、生きてかった……死にたくなんて、ないに、決まってるじゃない、ですか……」

「うん」

「でも、どうしようもないなら、しょうがないって、言い聞かせて……それで我慢して……どうにかしようって、抗う、気持ちも、なくって……僕は、どうしようもないです……」

「うん」

「いまさら、遅いの……」

「うん」

「ごめんなさい。泣き止むの、遅いです……」

「いいよ」

人目もはばからず（人という人もいないのだけど）、子供のよう  
に大泣きしたのは、ずいぶん久しぶりだ。それを、出会って三日く  
らいの人にすがり付いて泣くのだから、僕はよく分からない。

全部吐き出したら、本当の本当に悟った。気がする。

あの人の胸から離れて、またあとでと笑顔で手を振る僕は変なの  
だろうか。

帰路についていると、目の前に、二人の武士らしき人が立ちはだ  
かった。腰に下げた武器で、迷うことなく僕を斬りつける。

さしたる抵抗もせず、僕はあっさりと、その場に倒れた。

遠のく意識の中、僕は何を思っただろう。

- ハリスさんに、会いたいなあ。

どうせその願いは叶わない。僕はこの世のものとは思えない激痛  
と、止まらない吐血に苦しみながら、空に手を伸ばす。この手を、  
最後に握ってくれたのは、誰なんだろう。

閻魔大王かな、ハリスさんかな、大尉かな。できれば、ハリスさ  
んがいいな。

「ハ、リス、さ……」

僕の死へのカウントダウンは、終わった。僕は、もうこの世のも

のではなくなった。

願わくば、僕の死があの人<sup>が</sup>の重荷にならないように。

(後書き)

長ー！！ 長いよ！ 思った以上に長くなっちゃったよ。

今回は、「ヒューズケン君が自分の死期を知ったらどうなるか」という妄想から生れ落ちた産物です。史実ネタって言ってもかなりおかしなことになっていますが、それはもう流してやってください。ここまで読んでいただき、ありがとうございます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2467v/>

---

閻魔大王のカウントダウン

2011年8月1日03時10分発行